

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

皮膚科の臨床 (2007.02) 49巻2号:218～219.

臀裂部に生じたLocalized Acantholytic Acanthomasの1例

西薫, 飛澤慎一, 岸山和敬, 飯塚一

MINI REPORT

臀裂部に生じた Localized Acantholytic Acanthomas の 1 例

西 薫* 飛澤 慎一* 岸山 和敬** 飯塚 一***

症 例 53 歳, 男性

初 診 2004 年 9 月 10 日

主 訴 臀裂部のわずかに痒みのある皮疹

家族歴 同様の皮疹を持つものなし

既往歴 特記すべきことなし。

現病歴 約 10 年前から臀裂部に軽度の瘙痒を伴う皮疹があり, 市販薬を塗布していた。2003 年, 近医皮膚科を受診, ステロイド外用による治療を受けたが改善しないため, 北見赤十字病院皮膚科を受診した。

現 症 臀裂部に米粒大までの暗褐色から黒褐色の扁平に隆起した充実性丘疹が多発, 一部は融合している (図 1)。

臨床検査所見 HBS 抗原, HCV 抗体いずれも陰性, 血算, 生化学に著変なし。

病理組織像学的所見 黒褐色丘疹部: 角層は密に増殖するが, 不全角化はない。表皮は肥厚し, 基底層直上から表皮の中層で棘融解と異常角化細胞を認める。円形体, 顆粒体はない。真皮上層や血管周囲にはリンパ球主体の炎症細胞が浸潤する (図 2)。蛍光抗体直接法では組織に IgG, C3 の沈着はない。免疫組織学的検索で HPV 抗原陽性所見はなかった。

治療および経過 初診時, 尖圭コンジローマや bowenoid papulosis を疑ったが, 病理組織学的所見で否定した。臨床所見と棘融解を示す病理組織学的所見より, acantholytic acanthomas と診断した。マキサカルシトール (オキサロール®) の外用で



図 1 臨床像: 臀裂部に暗褐色から黒色の扁平に隆起した充実性丘疹が多発する。

瘙痒感は消失したが, 皮疹はほとんど変わらなかった。

S 考 察

病理組織で acantholytic dyskeratosis をきたす疾患には, 全身性のものとして Darier 病, Hailey-Hailey 病, transient acantholytic dermatosis (以下

* Kaoru NISHI & Shinichi TOBISAWA, 北見赤十字病院, 皮膚科 (主任: 飛澤慎一部長)

** Kazunori KISHIYAMA, 岸山皮膚科, 北見市

*** Hajime IIZUKA, 旭川医科大学, 皮膚科学教室, 教授

別刷請求先 西 薫: 市立稚内病院皮膚科 (〒097-8555 稚内市中央 4-11-6)

キーワード acantholytic acanthomas, 棘融解

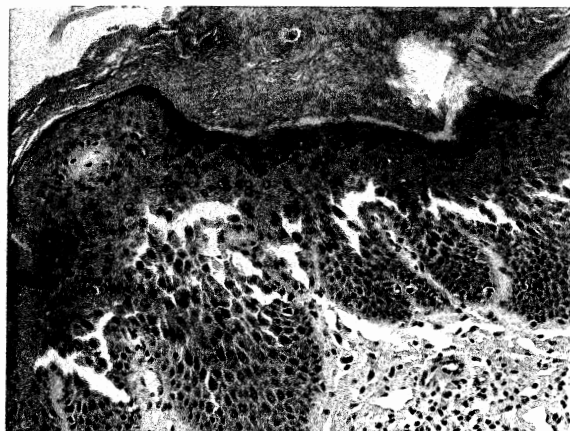


図2 病理組織像：角層は密に増殖，表皮は肥厚し基底層直上から表皮の中層で棘融解を認める。

TAD) が，限局性のものとして分節型 Darier 病，relapsing linear acantholytic dermatosis¹⁾，acantholytic acanthomas がある。また，孤立性のものとして warty dyskeratoma が知られている。また，時に偶発的所見として認められることもある。病理組織学的考えから Ackerman²⁾はこれらの疾患を focal acantholytic dyskeratosis と総称した。自験例は皮疹が臀裂部に限局した丘疹からなり，Hailey-Hailey 病を疑わせるびらんを，同部位あるいは他部位に認めないこと，病理組織学的に円形体や，顆粒体の所見がなく，また家族に同様の症状を示すものがいないことなどから，Darier 病を否定して acantholytic acanthomas と診断した。

ある領域に皮疹が限局して病理組織学的に acantholytic dyskeratosis を示す症例は，1984 年に Chorzelski ら³⁾が報告して以降さまざまな名称で報告されている^{4)~6)}，日本でも溝口ら⁷⁾が TAD

の名称でバングラデシュ人の女性例を報告しているが，臨床像，経過を含め本症と同一のものと思われる。Lever の教本⁸⁾では，disseminated acantholytic acanthoma という名称が用いられているが，自験例では臀裂部に皮疹が限局しているため，localized acantholytic acanthomas の名称を用いた。本疾患の特徴として，①単発または多発する丘疹または局面を呈し，②皮疹は大陰唇に多いが会陰，鼠径などにも生じること，③家族歴はないこと，などが挙げられる。しかし，本疾患の独立性や Ackerman²⁾が提唱した focal acantholytic dyskeratosis における位置付けについては未確定の部分があり，またこれまでには自験例のように臀裂部のみに限局した例は報告されていないことから考察を加え報告した。

本論文の要旨は日皮学会第 363 回北海道地方会において報告した。

(2006 年 7 月 13 日受理)

文 献

- 1) Duschet P et al : J Am Acad Dermatol, **33** : 920-922, 1995
- 2) Ackerman AB : Arch Dermatol, **106** : 702-706, 1972
- 3) Chorzelski TP et al : Am J Dermatopathol, **6** : 557-560, 1984
- 4) Cooper PH : J Cutan Pathol, **16** : 81-84, 1989
- 5) Wong TY, Mihm MC Jr : J Cutan Pathol, **21** : 27-32, 1994
- 6) Ravi S et al : Cutis, **67** : 217-219, 2001
- 7) 溝口志満子ほか : 西日皮膚, **59** : 835-837, 1997
- 8) David E et al : Lever's Histopathology of the Skin, 8th Ed, Lippincott Williams & Wilkins, 1997, p 688